網張ビジターセンター ニューズレター

Amihari visitor center

Vol.120
2025.5

ヒガシニホントカゲの力比べ

amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori ＊ 網張の森の生き物たち ＊ amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori

相手の頭部を噛んでいた〝ヒガシニホントカゲ〟

この数年に比べて、４月中旬でもかんじきを履いて森を散策できる程に残雪が多く、５月に入ってようやく遅めの春を感じられたある日、森の中でヒガシニホントカゲに出会いました。雪の重みから解放された落ち葉が降り注ぐ太陽光でカラカラに乾き、小さなヒシバッタが着地する微かな音も聞こえてきました。耳を澄ませながら歩いていると「カサッ、カサカサッ…」と少し大きな音が聞こえてきました。音のする方に目を凝らすと落ち葉と同化していたトカゲを発見。これまでは、成体や幼体の違いはあれど単独の姿しか見たことがありませんでしたが“２匹、それも片方が相手の頭部を噛んでいる…”初めての光景に面食らってしまいました。２匹は時折同じ態勢で動いてはピタッと動きを止め、相手の出方を探っているようにも見えました。写真を撮りながら近づいていくと、２匹は“ハッ”とこちらに気づくとすぐに一瞬で離れ、それぞれ落ち葉の下に素早く隠れてしまいました。てっきりペアかと思いましたが、この２匹はどうやらオス同士の可能性が。繁殖期を迎えたオス同士は、相手の頭の大きさや頭を押しつける力の強さをはかる行為をするようで、この時が正に力比べの真っ最中だったと思われます。またどこかで仕切り直しているのかな？耳を頼りに思わぬ光景に出会うことができました。

What is “Higashinihontokage”?

『東日本にすむトカゲ』

トカゲ科
全長：約 13～27cm
分布：北海道～本州東部（伊豆半島除く）

地上性で昼間に活動する。主に虫やミミズなどを食べる。繁殖期のオスは喉の部分が赤く色づきオス同士で争うことがある。幼体は全体が黒褐色で５本の明るい褐色の縦縞が頭から尾まで見られる。メスは幼体の模様が残ることが多い。

（参考図書：「どんないきもの？はちゅう類・両生類①」他）

光　と　色　の
い　ろ　い　ろ
－Point of view－
No. 7

センサーカメラに記録された生きものたちの息づかい

森を歩いていると動物たちの残した足跡やフン等のフィールドサインに出会うことがありますが、実際にその姿を目にする機会は稀です。そこで、赤外線センサーにより動きを感知し、自動で撮影されるカメラを用いて、定期的に森の調査を行ってきました。

20220315 撮影

季節の移ろいに合わせ、自然の色彩に溶け込むニホンノウサギ

20220419 撮影

筆者が担当するカメラは、広葉樹とスギの人工林が隣接する境界のほぼ同じ位置に設置しています。2016～2024 年までの 9 年間に渡る調査では、ノウサギの撮影回数が最も多く、合計 39 回に上り、特に 4～7 月にかけて集中した一方、冬季は減少する傾向が伺えました。

20220613 撮影

2022 年は、春先から連続して撮影に成功したため、ノウサギの換毛の様子を確認する事ができました。体毛が白く変化するのは、東北地方や日本海側の積雪地帯に生息する個体群に見られる特徴です（トウホクノウサギ）。このような冬毛への変化は、雪上でのカモフラージュの役割や、夏毛に比べ高密度なため断熱効果があると考えられています。全国的にノウサギの個体数が減少傾向にある中、網張地域では一定の割合で生息が確認されています。今後は、ノウサギ以外の動物や意外な生きものについても取り上げ、森の光と色が交わる中での多様な生態系をご紹介していきます。

前回の掲載内容に一部誤りがありましたので、訂正させていただきます。

誤「リンゴが赤く見えるのは、赤色以外の光を反射し赤色を吸収しているためであり、」
正「リンゴが赤く見えるのは、赤色以外の光を吸収し赤色を反射しているためであり、」

アミハリ・バーズ
Vol. 6 3

ウグイス

科名：ウグイス科
全長：14～15.5cm
生態： 漂鳥・留鳥
分布： 全国

雫石町の「町の鳥」にも選定されているウグイスは、鶯宿温泉の公式キャラクター「ケキョきち」と共に、広く親しまれています。「ホーホケキョ」で知られるさえずりのほか、谷間に響くような長い節回しの「谷渡り（ケキョケキョケキョケキョ…）」や、舌打ちのような「笹鳴き（チッチッ…）」など、ウグイス特有の多彩な鳴き声が知られています。ウグイスはやぶの中にひっそりと身を隠していることが多く、その姿を目にする機会は多くありません。そのため、より鮮やかな緑色の羽をもつメジロと混同される事もあります。実際のウグイスは、全体的に落ち着いたカーキ色をしており、周辺の環境にうまくとけこんで暮らしています。

撮影日：2016年7月20日

ベスト写真で綴る！

「岩手山カレンダー」撮影エピソード

－中山大太郎さん22年の軌跡－

元トレッキング・スキーツアーガイドの中山大太郎さんは、22年間にわたり四季折々の岩手山を撮影し「岩手山カレンダー」を制作してこられました。多くのファンや山仲間に愛されてきましたが、岩手山の噴火警戒レベル引き上げを受け、2025年版カレンダーを最後に制作を終えることとなりました。写真一枚一枚に一言では語り尽くせないエピソードが詰まっています。今年度は6回シリーズで、各月のベスト写真とその撮影にまつわるエピソードについてインタビューさせていただいたものをお届けします。

6月「新緑の平笠不動」（お鉢にて）　撮影日：2020年6月1日

カレンダーを作ろうと思ったのは、岩手山を一緒に登った職場の上司や小学校の同級生、お世話になった方々が岩手を離れ東京へ移ったことがきっかけです。一緒に登った故郷の山を思い出してもらえたらと、「写真 1 枚を贈るよりもカレンダーにして贈っては」と思い立ち手作りで制作したのが始まりです。印刷、ミシン目付け、製本まで全て手作業で行い、50部作るのに1ヶ月もかかりました。山仲間から口コミで広がり、カレンダーを希望する声が増えたため、印刷、製本は業者にお願いすることにしました。

「岩手山カレンダー」の写真はできるだけ新しいものを使用することにしました。これがプレッシャーの始まりですが、モチベーションにもなりました。毎月撮影のため何度も登ります。岩手山は半年は雪です。また撮影は天候に大きく影響されます。雲が取れるまで1、2時間待つこともありますし、待っても雲が取れずに諦めたこともありますが、我慢していると晴れることもありました。ただし時間が経つにつれて光線が変わり絵にならないこともあります。逆に偶然のタイミングで良い写真が撮れることもありました。

この写真は、馬返しから登り、反時計回りでお鉢を周り、頂上を過ぎた所に差し掛かった時、「あ、あそこに未だ雪が残っていた」と思いカメラを向けたものです。普段は構図をあらかじめ決めて撮影しますが、これは狙って撮ったものではありません。眼下の平笠不動避難小屋は時折利用しています。写真撮影が目的で登っているので、登頂にこだわることはなく、小屋で昼食を取り屏風尾根に登ることもありました。ある時から岩手山は登る山ではなく、登頂にこだわらない「遊ぶ山」になりました。「遊ぶ山」については次回にお話しします。

7月「競演」（ハッ目湿原にて）　撮影日：2018年7月14日

この写真は、七滝から登りお花畑で撮影したものです。コバイケイソウが一面に咲くのは3～5年に一度で、鳥海山も岩手山も申し合わせたように同じ年に群生します。この広いエリアで同じ様に咲くことがちょっと不思議な気がします。長年撮影していると、お花畑のコバイケイソウが小ぶりになってきたことが気になります。シャクナゲも年によってまとまって咲くことがありますが、この年は当たり年でした。シャクナゲは前年からつぼみを付けるので、来年の咲き具合が予測できます。構図をイメージし、シャクナゲが咲く前から何度も通いました。残雪の間からショウジョウバカマが顔を出すと、「あ～出てきた」と季節の移ろいを感じます。

最近のお花畑は花が少なく、群落も見られなく、あまり綺麗ではないように感じます。秋田駒ヶ岳のコマクサの群落は、何年後かに今のような一面の広がりが見られなくなるのだろうと思うことがあります。50年程前、岩手山のコマクサは日本で一番と言われていました。焼走りのコマクサは株が大きくとても見応えがあります。フィルム撮影の頃、白いコマクサを見つけましたが、残念ながらフィルムが切れていたため翌日再度撮影に行くと、その白いコマクサは盗掘されていました。乳頭山では白いハクサンチドリも咲いていましたが、その時は曇っていて帰りに撮影しようと思い戻ってみると、それも盗掘されていました。前回の岩手山入山規制の際には、コマクサの盗掘があったようです。自然の花は自然の中で見るのが一番で、苦労して登って見るからこそ、一番きれいに見えるのです。

自然観察会報告

ゆっくりやって来た春

（画像協力：岩手山地区パークボランティア）

4/6「根開きのブナの森で春を探そう」

積雪量の多い年で、雪どけもゆっくりペース。それでも木々の根開きは始まっており、野鳥のさえずりや木々の冬芽の膨らみに春を感じながらブナの森を歩きました。ゲレンデ沿いでは多くのクマ棚のあるブナの木を観察。クマの爪痕や動物の足跡も見られ、森では多様な生きものが共存していることを改めて感じました。「まだこれほど雪が残っていることに驚いたが、春の訪れも感じられた」参加者感想より。総勢 26 名

雫石町グリーン・ツーリズム

仙台市や苫小牧市の 4 校の中学生を雫石町グリーン・ツーリズムとして受け入れました。網張の森の自然観察や園路の落ち葉掃き、側溝の清掃、樹名板の制作・設置等を体験。初めての事に戸惑いながらも真剣に楽しく取り組みました。

“ヤマアカガエル”のオタマジャクシ生態飼育展示中！

４月 22 日と５月２日に森で採取した卵塊の一部を孵化させ、幼体を水槽に移して皆さんにご覧いただいています。

5/11「鞍掛山麓 花愛でるハイキング」

岩手植物の会の藤澤英俊氏を講師にお迎えし、現在咲いている花やこれから咲く花について解説していただきました。「エンレイソウは花が咲くまでに 10 年程を要します。皆さんは 10 年前は何をしていましたか？」など問いかけながらの解説に、参加者は興味深く耳を傾けていました。「初めて参加した。普段の生活とかけ離れた場所に来て楽しむことができた」「ツバメオモトが見られて大感激」参加者感想より。総勢 28 名

『岩手山八景』絵はがきセット好評発売中！

8枚セット700円
各種１枚100円

中山大太郎氏撮影による三ッ石山や秋田駒ヶ岳、御所湖から望む表情豊かな岩手山の写真です。

インフォメーション

6/14（土）「網張の森さんぽ＆写真入門」
9:30～12:00 網張ビジターセンター集合
講師：小坂 富男 氏（写団樹景）
定員：15名 ※要事前予約
参加料：大人800円 小学生以下400円

7/5（土）～7/9（水）「夏の網張の森ヒメボタル観察会」
19:40～20:40 網張ビジターセンター集合
定員：各10名 ※要事前予約
参加料：一人500円

国立公園で楽しむ親子の自然体験

7/19（土）「ナイトハイクと星空観察★」
18:50～20:50 網張ビジターセンター集合
講師：高橋 智香子 氏（星の案内人）
伊藤 修 氏（星の喫茶室）
定員：親子10組20名 ※要事前予約
参加料：大人800 円 中学生以下400円

8/2（土）「よるの森をのぞいてみよう！コウモリ調査体験と昆虫ライトトラップ」
18:50～20:50 網張ビジターセンター集合
講師：コウモリの保護を考える会
渡辺 修二 氏（岩手県立博物館学芸員）
定員：親子10組20名 ※要事前予約
参加料：大人800 円 中学生以下400円

現在開催中のビジターセンター企画展 5月1日(木)～6月30日(月)

－バードフォトいわて 2025 写真展－

パート１「鳥のいる風景」(5月) パート２「私のベストショット」(6月)

私たちは、野鳥たちの美しさ、生き生きとした姿を写真を通じて多くの方にお伝えしたいという思いから、本展を開催いたしました。日本には四季折々にさまざまな野鳥が訪れ、自然の豊かさを感じさせてくれます。彼らの姿を記録し、魅力を共有することが、自然環境の大切さを再認識する機会にもなると信じています。

本展では、岩手県内のバーダーによる力作を展示しております。飛翔する瞬間や、愛らしい仕草、厳しい自然の中で生き抜く姿など、それぞれの写真に込められた想いを感じ取っていただければ幸いです。 - 出展団体の言葉より -

モモンガのつぶやき

突然ですがクイズです。“スミレの花”と“ニワトリのオス”に共通しているものは何でしょう…？答えは「距」。スミレの花の後ろから出ている長細い部分を「きょ」と言い、他に「けづめ」とも読まれ、ニワトリのオスの脚の後方にある角質の突起を指しています。「けづめ」は攻撃や防除に用いられるとのこと。スミレの名前の由来は大工道具の“墨入れ”から来ているとの説がありますが、最初に名付けた人がニワトリの「けづめ」を参考にしていたら“ケヅメソウ”や“ニワトリバナ”なんて名前になっていたのかなぁ？我が家のニワトリを眺めながら何とはなしに思った春でした…。（佳）

十和田八幡平国立公園 網張ビジターセンター

来館者数 ◆ 3月 823人 ◆ 4月 826人
朝9時のビジターセンター平均気温 ◆ 3月 -3.2℃ ◆ 4月 2.2℃

発行 網張ビジターセンター運営協議会

〒020-0585 岩手県岩手郡雫石町長山小松倉 1-2（網張温泉）
TEL 019-693-3777 FAX 019-693-3778
URL http://amihari17.ec.ne.jp
E-mail amihari@vanilla.ocn.ne.jp

開館 夏期（4月から10月末まで）休館日なし 9時～17時